

バッハと美しきオルガンを巡る旅

S46年 経済 中村 潤一

7月中旬に武蔵野市文化事業団が企画協力したオルガニスト松居直美と行く『バッハと美しきオルガンを巡る旅』に参加しました。ライブチッヒの聖トーマス教会でバッハの音楽を聴き、更にトーマス・マンの自叙伝的な小説『ブデンブローク家の人々』の舞台になったリュウベックを訪れる魅力的な日程です。

旅行の目的は、聖トーマス教会で7月15日に開催されたバッハ国際オルガンコンクール最終選考会の演奏を聴き、次いで同コンクールの審査員松居直美さんと一緒にバッハにゆかりのあるオルガンを訪ねることです。

【ライブチッヒ】

ライブチッヒは菩提樹を意味するリプツィに由来し、古くから商業都市、また見本市開催都市として栄えてきました。商工業以外に加え、ドイツで二番目に古いライブチッヒ大学ではゲーテ、ニーチェ、ライブニッツ等多くの英才たちが学び、彼らの思想が外部に伝わり、更に書籍出版の町として有名になり、加えて音楽では聖トーマス教会



アウグストゥス広場



聖ニコライ教会内部

で楽長を務めたバッハやゲヴァントハウス管弦楽団を指揮したメンデルスゾーン他が活躍した歴史のある都市です。現在の人口は50万人を超えますが、旧市街地は徒歩で歩ける範囲に纏まっています。

上述した文化的な土壌があったためか、1989年のベルリンの壁崩れの動きもライブチッヒのアウグストゥス広場と聖ニコライ教会から始まったといわれ、街にはそれを記念した案内板が建っています。観光都市ではないのですが、旧市街地のカフェやレストランにはたくさんの人々が道を塞ぐかのようにテーブルを囲みビールを片手に歓談している様子が滞在中毎晩見られました。



革命案内



カフェレストラン

【聖トーマス教会とバッハ国際コンクール】

日本のお寺に鐘があるように、欧州の教会にはオルガンがあり、夫々の都市や町は経済発展に伴いお金をかけて教会やオルガンを立派にすることに努めて来ました。このため、バッハの時代のオルガンがそのままの姿で

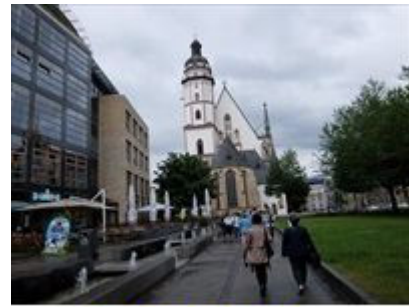


聖トーマス教会十字架

現存することは稀で、聖トーマス教会ですらオルガンを含め内装も改装され、バッハ時代と同じものは十字架と息子の洗礼に使われた聖台盤ぐらいとの説明を受けました。

ライブチヒでの初日は、バッハ博物館と聖トーマス教会の見学に続きクリ

ストフ・ヴォルフ博士のお話を聞くことから始まりました。内容は、オルガンを中心にバッハが辿った都市を年代別に説明されました。博士は高名な音楽学者で、『バッハ 学識ある音楽家』、『ロ短調ミサ』やモーツァルトに関しても『最後の4年間』の著作等が日本語に翻訳されています。



聖トーマス教会



聖トーマス教会内部

バッハ国際コンクールプログラム 富田 一樹さんの部分

XX. INTERNATIONALER JOHANN-SEBASTIAN-BACH- WETTBEWERB LEIPZIG

06.-16. JULI 2016

ORGEL · GESANG · VIOLONCELLO / BAROCKVIOLONCELLO

Kazuki Tomita

27 Jahre / Japan

Registranten: Gereon Behrendt, Jiwon Seo

Johann Sebastian Bach

Konzert d-Moll, BWV 596

Bearbeitung nach dem Konzert d-Moll, RV 565,

von Antonio Vivaldi

[Allegro] - Grave - Fuga - Largo e spiccato - [Allegro]

Johann Sebastian Bach

Wo Gott der Herr nicht bei uns hält, BWV 1128

Choralfantasie

Johann Sebastian Bach

Sonate G-Dur, BWV 530

Vivace - Lento - Allegro

Max Reger

Canon, op. 47 Nr. 1

Andante

Max Reger

Scherzo, op. 47 Nr. 4

Vivacissimo

Max Reger

Fuge, op. 47 Nr. 6

Vivace

Johann Sebastian Bach

Passacaglia c-Moll, BWV 582

オルガンの最終選考会はロシアとチェコ並びに日本の代表が争い、NHKの取材班もいました。各人課題曲を約1時間演奏しましたが、流石に最終選考会出場者に相応しく三名とも見事な演奏でした。最後に登場した日本代表の富田一樹さんが、演奏終了直後の午後9時過ぎに会場の外に現れ、少し弱音を吐きコンクールに参加していた仲間に大丈夫だと励まされていた様子を目の当たりにしました。結果の発表は午後11時過ぎでしたので、私はホテルに戻り、富田さんが1位になったことは明朝知りました。

翌日16日の午後に旧市庁舎で行われた授賞式を見た後、午後8時からの受賞者披露演奏会を聴きました。富田さんは1位獲得者らしく自信に満ちた演奏でしたが、2位のチェコのスポボダさんは気落ちしたのか、前日の演奏に比べ平凡な感じでした。歌手部門1位のパトリック・グラールのカンタータ第55番「われ貧しき者、我は罪のしもべ」の独唱は見事なもので、バッハのマタイやヨハ

れ貧しき者、我は罪のしもべ」の独唱は見事なもので、バッハのマタイやヨハ

ネの受難曲がこの教会の中でこんな風に演奏されたのかと感慨もひとしおでした。

【オルガンを巡る旅】

コンクール終了後は、オルガン部門の審査員の松居直美さんが加わり、バッハにゆかりのあるオルガンが設置されている教会を訪ねました。オルガンに関する知識は松居さんから教えて頂いたのですが、バッハ時代の有名なオルガン製作者は、第一にG. ジルバーマンがあげられ、その弟子にZ. ヒルデブラントやJ. ヴァーグナーなどがい



ナウムブルク
聖ヴェンツェル教会オルガン



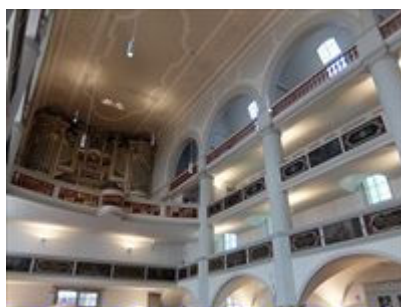
アルテンブルク城オルガン

ました。ジルバーマンは楽器を規模別にパターン化して製造し、効率の良さと質の高さで多くの注文を獲得しました。弟子のヒルデブラントは、オルガンの様々な可能性を探り音色の多彩さに特徴があり、オルガンでも様々な試みをしていたバッハとの相性はよかったようです。



フライベルク大聖堂オルガン

ライプチヒを拠点に訪れた教会等は、レータの聖マリア教会と聖ゲオルク教会、ナウムブルクの聖ヴェンツェル教会、アルテンブルクの城と教会、フライベルクの大聖堂、アイゼナハのバッハハウスと聖ゲオルク教会、ア



アルンシュタットバッハ教会

アルンシュタットの博物館とバッハ教会ですが、特にヒルデブラントが手掛けたナウムブルクの聖ヴェンツェル教会のオルガンが印象に残りました。

オルガンの音色を言葉で表現するのは難しいのですが、聴いた瞬間に他の教会のオルガンとは少し違う木管楽器のような、やさしくやわらかい響きが魅力的でした。

【リューベック】

リューベックにはバッハが400キロメートルを歩いて聴きに行った有名なオルガン奏者のブクステフデが務めていた聖マリア教会があり、更にトーマス・マンが若干26歳の時に執筆し、ノーベル文学賞の対象作となった『ブッデンブローク家の人々』の舞台です。私は勝手に昔読んだ小説の街並みの様子が現在でもあまり変わりなく残っていると信じ込んでいましたが、リューベックは人口20万人を超える大きな都市である上、空襲を受けたため近代的な建物も結構あり、想像していた姿と違っていました。また、トーマス・マン兄弟を記念したブッデンブロークハウスは意外にこじんまりした建物でした。



リューベック聖マリア教会
落ちた鐘



ブッデンブロークハウス

バッハが訪れた聖マリア教会は爆撃で壊されましたが、少し離れた聖ヤコビ教会はオルガンの主要部分を疎開させていたため、バッハ当時に近い音色が残っているそうです。そのオルガンの演奏を聴いたあと、教会の対面にあるレストランでリューベック音楽大学に留学中の富田さんを迎え夕食を一緒にすることができました。比較的近くの席であったため、富田さんから直接ドイツでの生活振りやコンクールの様子並びに音楽に対する考え方、等を伺うことができました。富田さんは音楽理論が好きで、調律や対位法等を学ぶとバッハが楽譜で何を求めているのか理解できるといいます。演奏家の中には理論を十分に学ばず、音符を表面的に音にしている演奏が少なくないと厳しい意見も述べていました。技術面では今回のコンクールでトップになった腕前ですから、理論に裏付けられたバッハの演奏に今後も真摯に取り組めば、立派な音楽家になる可能性は高いと期待できます。



リューベック
聖ヤコビ教会オルガン

【ハンブルグ】

今回の旅行で最後に訪れたのはハンブルグです。リューベックと並んでハンザ同盟で栄え、現在のドイツで二番目に大きな都市です。同地の聖ヤコビ教会



ハンブルグ
聖ヤコビ教会

には世界中のオルガン演奏家と製作者が憧れる立派なオルガンがあり、このオルガンの演奏を録音したCDは何種類もあります。大型のオルガンなのですが、聴いた印象は厳格な音色が無理なく響き、名声に偽りが無いと思いました。



ハンブルグ
聖ヤコビ教会オルガン

以上でオルガンを巡る日程は終了しましたが、バッハに纏わるオルガンの響きを現地の教会の中で生で聴くことができたことは本当に貴重な経験でした。今回の旅行は事前に説明会があり、女性の参加者が多く私を含めほとんどの方がホテルは一人部屋であることは承知していましたが、実際に旅行が始まると多くの参加者が教会音楽に携わるオルガン奏者や合唱団員として活動されていることがわかりました。

帰国後バッハ研究家の樋口隆一さんの本を捲っていたら、著者がバッハ研究の世界に入った切っ掛けを見つけました。日本では音楽がただ単にコンサートホールで何か改まった形で聴いて、その時だけの特殊な晴れの場になっているが、ドイツではバッハの音楽は、市民が平服で教会に来て、お祈りをしながらみんなの人生を考えている。この1年とか、この10年とか、この60年とか考えながらお祈りをしている。それで、毎日の生きる糧としてバッハの音楽が鳴り響いている。それが、ドイツの美しいところであり、素晴らしさで、それをドイツ留学時代に体験した。聖トーマス教会で毎週金曜日にカンタータの演奏会があり、その演奏の出来不出来より、市民社会の中で音楽が本当に息づいていることに感動した、と書いてありました。

今回の旅行で私にはオルガンに関わる専門的・技術的な事柄は殆ど理解できませんでしたが、参加者の方々が、カンタータの歌詞やバッハが憧れた演奏家達を歴史上の存在ではなく身近にいる先生や友人のように何気なく語っている機会にオルガンが響く現地の教会の中で幾度も接しました。3日目の聖トーマス教会での夕拝を含め、その様子を見てみると、彼らはバッハの世界に自然に包まれていると強く感じました。私は長年有名な演奏家を聴いてきたと自負していましたが、それは樋口さんをご指摘されている通り、観客席から改まった晴れの場で音楽に接してきた面が強く、この旅行を通してこれまでと異なる新たな世界にふれることができたと感じました。